

着により反転が完全に不可能となった症例に対しては癒着剥離術が有用であった。

5) メッケル憩室症29例の検討

荒井 洋志・新田 幸壽 (新潟市民病院)
内藤 真一 (小児外科)

当科において1990年4月から2000年9月までに経験したメッケル憩室切除症例29例について検討した。年齢は、他疾患で開腹手術時に発見された症例を除くと7ヶ月から13歳までであった。性別は、男児22例、女児7例で、男児に多い傾向を認めた。発症原因は、腸閉塞12例(腸重積2例、軸捻転1例)、消化管出血6例、憩室炎1例で、他疾患で開腹手術時に発見された症例が10例(無症状のLittreヘルニア1例)であった。これらのうち術前診断されたのは、消化管出血6例中シンチを施行された5例のみであった。手術は、楔状切除が18例、回腸部分切除が11例であった。組織迷入は、胃粘膜が10例、膵組織が1例、胃粘膜と膵組織が2例であった。死亡症例は、横隔膜ヘルニア手術時にメッケル憩室切除を施行した1例のみであった。

6) 小児在宅静脈栄養患児におけるマンガン蓄積に関する検討

—微量元素製剤投与の面から—

飯沼 泰史・岩淵 真
内山 昌則・八木 実
金田 聡・大滝 雅博 (新潟大学)
山崎 哲・村田 大樹 (小児外科)

在宅静脈栄養(HPN)患児4例を対象に、市販の微量元素製剤投与の面から、これら患児におけるマンガン蓄積の問題点を検討した。その結果、4例中3例で高マンガン血症を、4例全例の頭部MRIT1強調像で、マンガン沈着を示唆する基底核の高信号領域を認めた。4例とも市販の微量元素製剤を投与されており、本剤投与によるマンガン蓄積が明らかとなった。

7) 最近経験したヒルシュスプルング病の5例

内藤万砂文・広田 雅行 (長岡赤十字病院)
小児外科

ヒルシュスプルング病の治療法は最近変化しつつある。rectosigmoid typeのなかでも無神経節腸管の短い症例では経肛門的な術式が標準術式となりつつある。

total colon aganglionosisには自動吻合器を用いたMartin変法が行われるが、残す結腸は短くなる傾向にある。最近我々の経験したrectosigmoid type 2例、total colon aganglionosis 3例の治療法と経過を供覧し、ご批判を仰ぎたい。

8) 経裂孔の手術を施行した特発性食道破裂の1例

多田 哲也・小出 則彦 (立川総合病院)
蓮田 憲夫・丸山 亮 (外科)
鈴木 力 (新潟大学)
保健学科

症例は45歳男性、嘔吐後の背部痛を主訴に近医受診、CTにて下行大動脈瘤を疑われ当院心臓血管外科へ紹介、精査にて特発性食道破裂と診断され、外科転科となった。

両側胸腔ドレナージ等保存的治療にて感染症状軽快せず、入院後9日目に手術を施行した。開腹、経裂孔のアプローチにて両側胸腔内のcoagulaを除去し、縦隔から両側胸腔内にsuction drainを挿入した。食道破裂部は2層に閉じ、胃底部で被覆した。気管切開術、空腸瘻造設術も施行した。術後は著明な合併症なく経過した。全身状態不良な症例や、縦隔から両側胸腔内のドレナージを要する症例には経裂孔のアプローチが有用と思われる。

9) 壁外性発育し巨大腹腔内腫瘍で見つかったAFP産生胃癌の1切除例

吉田 徹・鈴木 全
島影 尚弘・草間 昭夫
内田 克之・岡村 直孝 (長岡赤十字病院)
若桑 隆二・田島 健三 (外科)

症例は43才女性。臍下の巨大腹腔内腫瘍にて卵巣瘍を疑われ当院婦人科を受診したが、骨盤部MRI、CTにて胃原発の腫瘍が疑われ外科受診となる。胃内視鏡では体下部体弯側に2型の腫瘍を認め、生検でgroup 5 por 2~tub 2と診断された。腫瘍マーカーはAFP 42735 ng/ml、CEA 25.5 ng/ml、CA125 56.7 U/ml P IVKA II 454 mAU/mlと高値を認めた。以上より壁外発育型AFP産生胃癌の診断で手術を施行した。一部横行結腸に浸潤し、横行結腸部分切除を含む胃亜全摘術を行った。病理検査では胃壁内の腫瘍はtubular adenocarcinomaが主体だが、壁外腫瘍はYolk sac tumorが主体でAFP陽性細胞を多数認めた。現在外

来にて経過観察中である。

10) 早期胃癌再発症例の検討

鈴木 聡・三科 武
伊達 和俊・山崎 哲
丸山 聡・高橋 一臣 (鶴岡市立荘内病院)
加藤 博久・松原 要一 (外科)

早期胃癌術後再発例の臨床病理学的特徴と VEGF 発現との関連について検討した。88年から98年3月までに当科で切除した胃癌初発例のうち、早期胃癌は452例(全体の65.6%)で、このうち再発例を4例に認め全てsmであった。これらと、sm, n+非再発23例を臨床病理学的特徴と VEGF 発現の有無で比較検討した。再発4例中2例は肝転移死で、いずれも VEGF が陽性であり、残胃再発、リンパ節再発死した各1例は VEGF が陰性であった。また、非再発23例のうち VEGF 陽性は3例で、腫瘍径35mm以下の分化型で静脈侵襲は全例陰性であった。以上より、VEGF の発現は静脈侵襲の陽性率と相関を認めず、VEGF は早期胃癌における強い肝再発予測因子になり得ると考えられた。

11) 癒着性腸閉塞に対するイレウス管による治療状況

村上 博史・荒木智恵子 (総合西荻中央病院)
村上 富吉 (外科)

平成7年より12年迄に当科で施行した開腹手術のうち、癒着性腸閉塞にてイレウス管を挿入した症例は15例であった。そのうち13例(86.7%)は手術を要さずに腸閉塞が治癒していた。この13例を対象として、臨床症状とXP像より治癒日を推定、イレウス管の留置期間、排液量と推定治癒日との相関を調べた。次に腸閉塞の発症が原疾患に対する手術入院時か否かで、同時性と異時性に、また、イレウス管の進達程度により空腸群と回腸群に分け、それぞれの推定治癒日、イレウス管の留置日数、イレウス管の進達長、推定治癒日の排液量、イレウス管除去後の在院日数等について検討した。異時性は同時性に比しイレウス管の進達長が有意に深く、またイレウス管除去後有意に早期に退院していた。回腸群は空腸群に比し推定治癒日の排液量が有意に少なく、また管の留置日数が有意に長かった。

12) 消化器系悪性疾患と免疫療法

福田 稔 (福田 医院)
安保 徹 (新潟大学
医動物学教室)

我々は平成8年より刺絡療法は自律神経の乱れを整え、白血球中の顆粒球とリンパ球のバランスを整えることを確認した。そしてこの理論と実際が難病と言われている多くの疾患を快方に向わせ、治癒の状態になることを報告してきた。

今回は刺絡療法にレーザー療法、電子針療法を加えて消化器系悪性疾患に治療を行なった結果を報告する。

13) 外科有床診療所における5年間の診療経験

三浦 宏二 (がん検診クリニック
三浦外科)
川合 千尋 (消化器科・外科
川合クリニック)

95年10月に病棟をオープンして手術を始めてから丸5年になる。幸い、入院施設と手術室を持つことができたので、症例数は多くないが一般病院の外科とほぼ同じ内容で診療を行ってきた。

5年間の全身麻酔手術数は438例で、ラパコレが最も多く182例、ラパコレ以外の腹腔鏡手術(ヘルニア、虫垂炎、肝嚢胞開窓術、脾摘、癒着剥離)が58例で腹腔鏡手術が全麻手術全体の55%を占める。以下大腸癌58、乳癌55、胃癌30の順であるが、食道癌の開胸腹手術が3例、原発性肝癌の肝右葉切除1例、乳頭部癌の膵頭十二指腸切除1例が含まれている。腰麻手術は102例で、ソ径ヘルニアが37例、痔が63例、急性虫垂炎が2例である。この他、局麻手術が245例、内視鏡的大腸ポリープ切除が747例である。癌の早期発見、早期治療を目的に、人間ドックでの上部、下部の内視鏡検査、mammography、CTによる乳癌や肺癌の早期発見などに力を入れている。胃内視鏡および大腸内視鏡検査が年間それぞれ約900件および1000件(TCF:600、SCF:400)、人間ドックの受診者は現在年間約400人である。外来は月曜から金曜の午前中で、上部内視鏡とSCFはこの間に行う。火曜と木曜の午後は全麻手術と腰麻手術、月、水、金の午後はTCFと局所麻酔手術を行っている。平均外来患者数および平均入院患者数はそれぞれ17.8人、6.5人と決して多くはないが、ほとんどが術前、術後患者もしくは内視鏡検査の患者であり、診療報酬の平均単価は比較的高いと思われる。